

浦賀文化

平成18(2006)年1月4日

第5号

Email: uragabunka@yahoo.co.jp
ホームページ開設準備中

編集・発行：横須賀市浦賀文化センター 〒239-0822 横須賀市浦賀町7-1 電話& FAX 046-842-4121

第18回

浦賀文化センター特別展

鯛が天下を動かした!! 浦賀干鯛問屋の盛衰

当館では、中心事業である特別展を、二月三日から十八日までの十六日間、開催いたします。浦賀の歴史や文化などを、毎回いろいろな角度からテーマを変え、理解と関心を深めるための催しです。

今回のテーマは「鯛が天下を動かした!!」浦賀干鯛問屋の盛衰です。現在では高級魚になりつつあるイワシが、江戸時代においては良質な肥料や、庶民の明かりを灯すための燃料だったことをご存じでしょうか?イワシは当時、マカセ網を使い大量に捕れたため、多岐にわたり余す所なく利用されました。そのイワシを干したものを干鯛と言います。かつてその中継

基地として浦賀の町は繁栄していました。今回の特別展では、干鯛の流通の中継地としての浦賀の役割やその後の文化に与えた影響を展示品やパネルを通して紹介いたします。

【期間】2006年2月3日(金)～18日(土)
10時から16時まで

町内の歴史

浦賀町五丁目(荒巻)

明治の初めごろに開店したという「うなぎ梅本」の五代目が、奥さんと一緒に何葉かの古い写真を手に暖簾の奥から現れた。開口一番、「なかなかいい写真がなくて」と大正六年の叶神社のお祭りのときに撮ったものを見せてくれた。当時、荒巻にはたぐさんのお店があり、お祭りの金樽さんになると二日間着る

跡地には「湊をいかすものを」...

三、四枚の着物を競い合っ



通りは荒巻仲通商店街と呼ばれ、ドック最盛期にはたくさんの人で賑わい、給料日には屋台も出たとか。ドックや役場など浦賀で働く人たちのお弁当を、「梅本」など四軒で全部まかっていた時期もあったという。

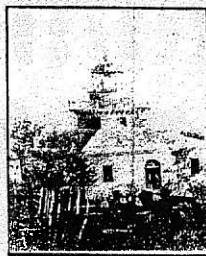
県下でも有数の賑わいを見せ、あの勝海舟も闊歩したという湊町浦賀、今ではその面影さえなくなっている。「ドック跡地には湊をいかすものを」と期待を寄せ、再び活性化することを街全体が望んでいる。(中井、)

横須賀海上保安部

日本初の洋式灯台 観音埼灯台

初代観音埼灯台は国内で初めての洋式灯台で四角形の洋館の上に灯塔があり、建設には当時の横須賀製鉄所で焼いた約六万五千枚のレンガが使われまし

た。灯台は、フランス人技師フランソワ・レオン・ヴェルニーが明治政府の依頼で設計したものです。



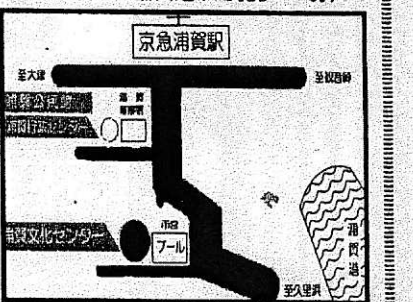
てしまいました。その後、1925年(大正十四年)六月一日に再建され現在に至りますので、現在の灯台は三代目になります。

灯台敷地内には、昭和二十三年の灯台八十周年記念にもない高浜虚子が詠んだ歌碑と、昭和四十三年の灯台百周年記念にもない大久保澄青(大久保武雄初代海上保安庁長官)が詠んだ歌碑があります。

また、昭和四十六年には、叙情画家の谷内六郎氏が一日灯台長として招かれており、これを記念して描いた「観音埼燈台にて」が残されています。(横須賀海上保安部・永田)

*講演会「干鯛問屋物語」
【日時】2月4日(土)
13時30分～15時
【場所】浦賀公民館会議室
講師 山本詔一(浦賀文化センタースーパバイザー) 先着70名
浦賀文化センターの学習室は特別展開催等のため1月30日(月)～2月23日(木)の間、お休みになります。

郷土資料館 浦賀文化センター (浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分)



所在地：横須賀市浦賀町7-1
電話：046-842-4121
ファクス：046-842-4121

東西風

あけましておめでとうございます。本年も「浦賀文化」をよろしくお願ひします。一年は早いですね。生活スタイルの変化も年々加速状態ではありませぬか。先日、ダイヤル式の黒電話を見つけた小学生が、ダイヤルの穴に指を入れ、プッシュするだけで回そうとしないので、ダイヤルを回さなくては通じないことを教えると、ダイヤルを回して「この電話遅いね」とです。交換手が出て、番号を伝えていた時代を知る者にとっては、格段の変化です。こうした世の中の動きに対して、もう一度自分たちの生活スタイルを足下から見直すという動きがあります。そう、この間月を設けてくれればなあと思っているのは私だけでしょうか。

発行：郷土資料館 浦賀文化センター

休館日 第3日曜日・祝日・年末年始

☎046-842-4121

「昔の浦賀」写真展

懐かしいあの時代に
タイムスリップ！

江戸時代から湊町として賑わい、黒船の来航という一大事を経験した浦賀は、明治時代から造船の町として栄えました。町を歩くとも所旧跡や古い町並みに出会い、遠い昔に思いを馳せることができるでしょう。また、風光明媚な場所も多く、中でも観音崎は横須賀市内で一番の観光スポットとなっています。そんな浦賀地域も、住友重機械工業(株)浦賀造船工場の閉鎖に代表されるように、昔ながらの町並みや風景が時代の流れとともに変わりつつあります。



昭和40年代の浦賀の町並み

そこで今回の写真展では、明治から昭和四十年代までの「古きよき時代」の浦賀の町並みや風景の写真を展示し、昔の浦賀を再現します。さあ、あなたも懐かしいあの時代にタイムスリップして浦賀の魅力を見つけてください。

【問い合わせ】浦賀行政センター ☎(84) 4155

【期間】平成18年1月26日(木)から28日(土)の午前9時から午後4時まで

【場所】浦賀文化センター(主催)浦賀地域文化振興懇話会

まもなく写真展が開催されるので昔の浦賀の写真を見ていたら、やはりドック抜きには語れない歴史があることを感じました。後から来た者でもそうですから、生まれた時から住んでいる方にはもっと感慨深いものがあることでしょう。その象徴であるクレ

笑話一題

「んがなくなり視界が開けたのか、昨秋の東浦賀の紅葉はとてきれいでした。跡地問題もこの自然を残しつつ、いろいろな人の意見を取り入れて進展することを願っています。ちなみに現在当館には、二〇代から六〇代の職員が揃っています。何かの役に立たないかな? (な)

案内

●中島三郎助まつり

浦賀奉行所与力・中島三郎助を顕彰するイベントです。黒船シチュー想作試食会、舞台アトラクション、浦賀道パネル展、模擬店のほか、レンガドック活用イベント実行委員会による産業遺産紹介ツアー、レンガドック活用アイデアコンペ作品展、展示などを開催します。

【日時】1月28日(土) 10時～15時

【場所】住友重機械工業(株)浦賀工場内

【問い合わせ】浦賀行政センター ☎(84) 4155

展示室の紹介

●江戸時代の水道管

昭和五十六年に浦賀行政センター前の通りで発掘されたもので、地下約一・五メートルに埋設されていました。江戸時代後期のものとみられ、人々の生活用水、浦賀湊に入港する船にも給水されていたようです。当時の人の優れた技術と浦賀の繁栄ぶりを見ることが出来ます。ボックス型のものは管と管をつなぐ役目をしています。

黒船来航譜

開港への序曲

監修 大久保利謙
(毎日新聞社 一九八八年)

蔵書

黒船来航譜

嘉永六年(1853)のペリー来航は、幕府や藩はもとより一般庶民にも大変な衝撃を与えました。当時の千石船の十数倍という大きさだけでなく、帆もないのに自由に動き回る「黒船」に大きな不安とほんのちよつとした期待の入り混じった思いを抱かせたようです。

鎖国から開国への歴史的時期を、幕閣・藩主・藩士・庶民がそれぞれの立場でどのように乗り越えようとしたのか、文字による記録とは違ったかたちで残された多くの図絵や遺品などが、私たちに語りかけてくれます。

「幕末風俗図鑑」の中には、町絵師の手によると思われる庶民の表情が豊かに表現されていて、なかなか興味をそそられます。こうしたものを見ると、今までとはちよつと違った角度からこの出来事をとらえることが出来ます。一度、ご覧を。(一)

歴史語り座・浦賀 ⑤

郷土史家 山本詔一



三浦半島に出来た最初の台場(砲台)は、会津藩が築いた観音崎と浦賀の灯明堂の裏山・平根山それに城ヶ島の三箇所であった。これらの台場はすべて見晴らしの効く山の上に置かれた。しかし、天保八年(1837)に来航したアメリカ船モリソン号に、この台場から砲撃をくわえた時に、これがいかに効力のないものであるか認識させられた。

この後も異国船が来航する度に海防の見直しが図られた。こうした状況のなか、観音崎の台場の移築が命じられたのは嘉永三年(1850)十二月のことであった。この時三浦半島を警備していた川越藩に対して、筆頭老中の阿部伊勢守は観音崎台場を台場下の高巣と呼ばれているところへ下ろし、さらに鳥ヶ崎と亀ヶ崎に新規の台場建設も申し渡された。

この書類には高巣台場には大筒七挺、鳥ヶ崎には五挺、亀ヶ崎には三挺を据え、このために幕府から新たに三貫目の大筒一挺、二貫目筒を四挺、一貫目筒を五挺貸し出すことも記されていた。

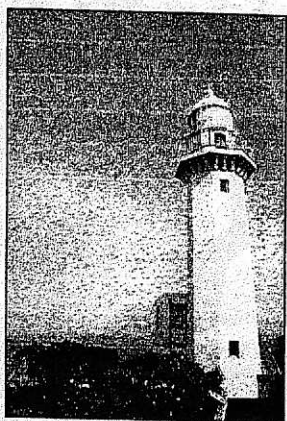
幕府の命を受けた川越藩は、幕府の意向に沿った台場建設

観音崎台場の移築



の詳細な仕様書をこしらえた。この仕様書に基づいて、三浦半島周辺までを含めた川越藩領の中から、工事を委任できる身元確かな者を求めた。川越藩の求めに応じて、名乗りを上げたのは鴨居村の二人と他村の二人であった。工事はこの四人に落札され、これで台場建設が予定通り始まるものと思つたが、意外にも地元鴨居村の人々から抗議があり、工事着工が遅れた。鴨居村の人々の主張は台場建設に対して反対を唱えるものではなく、逆に大賛成であった。その理由は台場建設が始まれば、鴨居村の人が労働力として使われ、その代償として現金収入が増えるという魅力的な場所にあった。

しかし請け負った者は、鴨居村の人々を労働力として使う考えは全く持っていなかった。これでは三年来の不作や漁業の不振から逃れられることができないので、地元のことをもっと重視してくれる者にと頼んでいる。



現在の灯台の所が台場跡